

# 有孔砥石考

行田 裕美

## 1. はじめに

1985年の初夏は津山中核工業団地の造成に伴う一貫西遺跡の調査を行っていた。筆者が調査担当で作業員15人と苦楽を共にしていた。ある日、この中の一人の稻垣光男さん（津山市西吉田141-2）が腰のベルトに偏平な有孔砥石をぶら下げておられた。まさに弥生時代の情景を今に見るような思いがし、早速、昼の休憩時にお願いして写真を撮らせていただいた（第1図）。一貫西遺跡の調査終了後も別の遺跡の調査が継続したので、足掛け3年数カ月にもわたる調査でのお付き合いの中で、後にも先にもこの砥石を見たのはこの日限りであった。稻垣さんはこの日、発掘調査に出る前に早朝から砥石を持参し草刈りに行かれ、そのまま現場に来られたのであった。研ぐ時は水の代わりに露、露のない日中は唾を使ったということであった。

あれから10年後の1995年7月、西吉田北遺跡の調査で再び稻垣さんと苦楽を共にすることになった。10年前の砥石の話をしたら、「今もあるでえ。いりやあげるでえ。」ということで、すんなり譲り受けことになった。

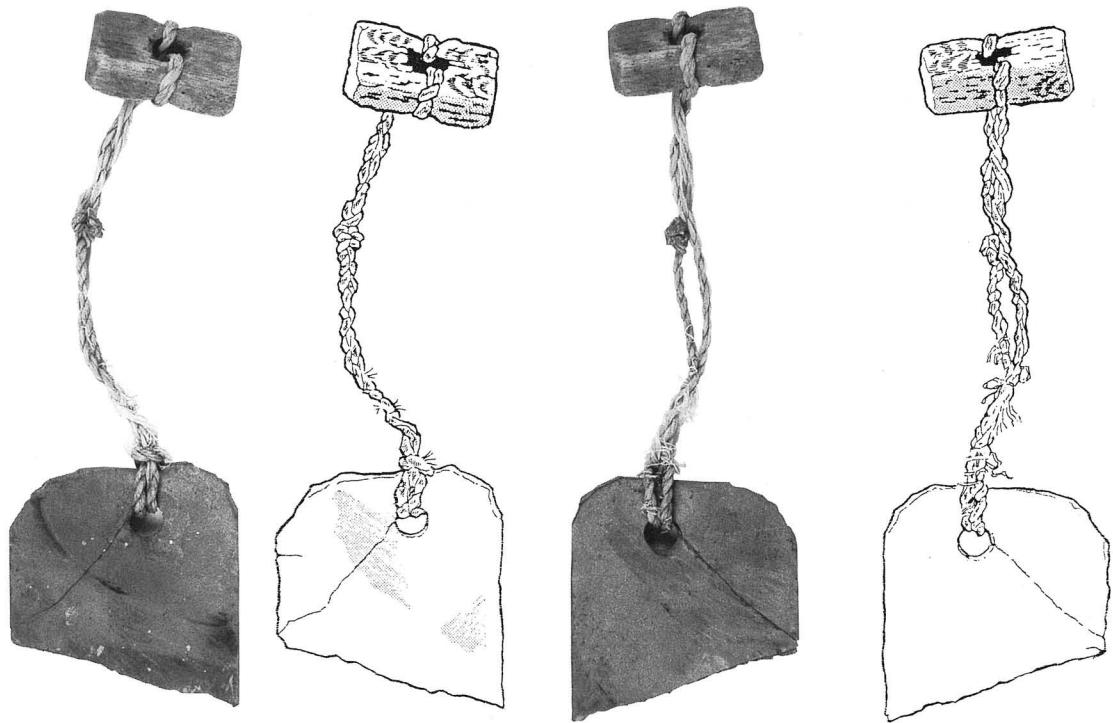
これを機に、稻垣さんの現代の有孔砥石と弥生時代の有孔砥石を考えてみたい。

## 2. 稲垣さんの有孔砥石

稻垣さんの有孔砥石は現存最大長7.2cm、幅6.1cm、厚さ0.7cmである。現存としたのは下端部が折れて欠損しているからである。折れ口には接着剤のボンドが付着している。現存部も一度折れてボンドで接合した痕跡がある。砥面には鎌を研いだときの鋸が付着し、部分的に褐色に変色している。中央部上位には径0.9cmの孔が穿たれている。穿孔は一方向から行われている。この孔に紐を通し、

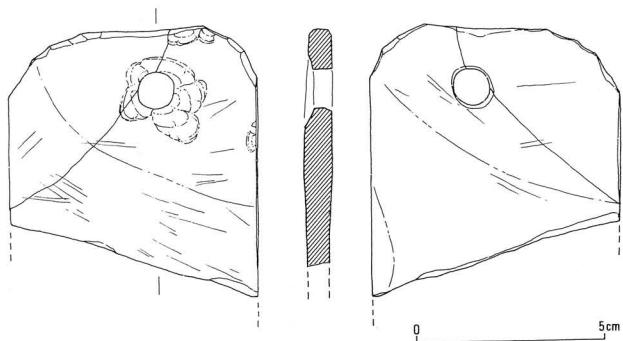


第1図 腰に砥石をぶら下げた稻垣さん（1985年初夏）



第2図 稲垣さんの砥石 (スケッチ:家元弘子)

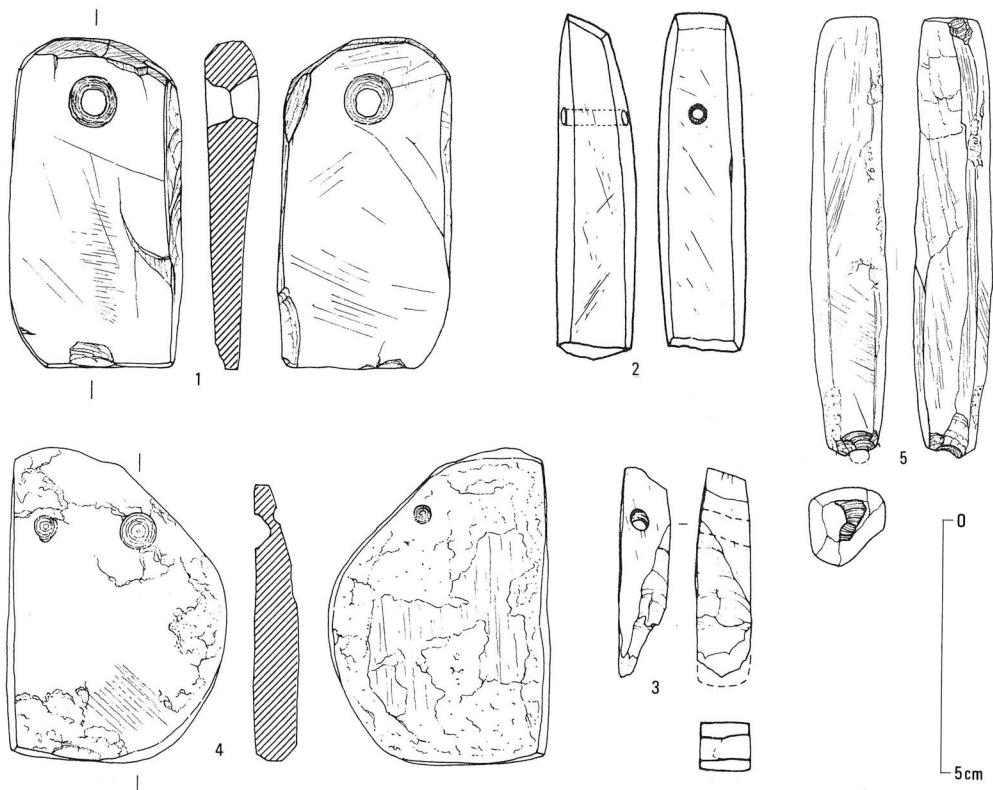
紐の先端にはベルトに挟み固定するための角材が取り付けられている。角材は長さ4.3cm、幅2.3cm、厚さ1.3cmで中央部に径0.9cmの穴が開けられている。角材の中央部の角は紐を取り付けやすいように抉られている。他の角もきれいに面取りされている。砥石と角材との紐の長さ12.5cmである。砥石の材質は砂岩のようである。紐は化学合成繊維、角材はラワン材である。



第3図 稲垣さんの砥石実測図 (S=1:2)

### 3. 弥生時代の有孔砥石

一般的に砥石と総称されるものは大きさ、形態、石材等非常にバラエティーに富み、住居址等からかなりの量が出土する。大きさは人頭大から2・3cm前後のものまで多様である。大きなものは置砥石、小さなものは手砥石であろうか。形態はハンバーグ状を呈するもの、角柱状のもの、円柱状のもの、板状のもの、孔を有するもの等々である。石材も砂岩、頁岩等多種にわたる。しかし、これら多種多様にわたる砥石は従来、石器の器種として取り扱われることがなく、これまで大きさ、形態、石材等に基づく議論がなされなかったように思う。このことはそれ自体が製品ではなく、常に研磨という行為の受け身の所産品であり、研磨の対象物である鉄製品の器種の違いによって自ずから形状を変えなければならないという宿命を負わされていたことによるものと考えられる。従って当然のことながら、不定形なものが多く、それ自体では型式学的方法による考古学の議論の対象になりにくかったということができるかも知れない。



第4図 弥生時代の砥石 (S=2:3)

これら多種多様の砥石の中で、津山市内出土の有孔砥石を集めてみたところ、案外少なく確実に孔を有すものは第2図の1～3の3点しか見当たらなかった。有孔のものに限定すると非常に数が限られていることに今更ながら驚かされた。

1は押入西遺跡(註1)の弥生時代中期後半の住居址から出土した。最大長6.5cm、最大幅3.4cm、最大厚1.1cmの板状のものである。中央部上位に径0.5cmの孔が穿たれている。穿孔は両面から行われている。石材は頁岩と思われる。

2は大田十二社遺跡(註2)の弥生時代後期後半の住居址から出土した。最大長6.7cm、最大幅1.7cm、最大厚1.6cmの角柱状のものである。下端は欠損しているが、他の面は全て砥面として使用している。中央部やや上位に径0.3cmの孔が穿たれている。穿孔は1方向から行われているようである。石材は頁岩である。

3は向林遺跡(註3)の弥生時代後期末の住居址から出土した。最大長4.1cm、最大幅1.1cm、最大厚1cmの角柱状のものである。中央部上位に径0.4～0.5cmの孔が穿たれている。穿孔は両面から行われている。石材は不明である。

他に参考例として穿孔途中のもの(4)、穿孔過程で欠損したもの(5)をあげた。4は板状の素材の表裏両面から穿孔しかけて途中でやめたものである。5は棒状の先端部に表裏両面から穿孔しようとして、先端が欠損したものである。いずれも押入西遺跡の弥生時代の中期後半の住居址から出土したものである。これら穿孔途中もの、欠損したものを含めても有孔砥石の数はそんなに増えるものではない。

#### 4. 有孔砥石考

まず、孔の機能であるが、稻垣さんの所持例を見ても明らかなように、紐を通すためのものであつたことは間違いないと思われる。民俗事例を無批判に適用することを肯定するわけではないが、本例

の場合、疑う余地はあるまい。では、この紐はどのような役割を果たしたのであろうか。稻垣さんの事例では、先端に角材を取り付けて腰のベルトに挟み、ぶら下げるというものであったが、弥生時代の出土例もその様であったかどうかは証明する術はない。しかし、あくまでも紐を通すという行為がある以上、腰にぶら下げるか、手に持つかは別にしても携帯するためのものであるということは想定してもよさそうである。この想定が許されるなら、有孔砥石は携行品であるということができる。

携行品である以上、重量が問題になってくる。上記3例と稻垣さんのものを加えた4例の中では、稻垣さんのものが最も大きいのであるが、総重量は50gにも満たない。この重さだと携行にはなんら影響はなく、むしろ所持しているのを忘れるぐらいの重さである。従って、有孔砥石は小さく、軽量であるということができる。

次に、研がれる側、すなわち鉄製品についてふれることにする。その前に、津山市内での弥生時代の鉄製品の出土例を確認しておこう。確実に器種の判定できるものは、斧4点(註4)、ヤリガンナ8点(註5)、鎌2点(註6)の3器種、計14点である。時期は中期後半から後期末までわたる。

さて、この3種の鉄製品と有孔砥石を結びつける作業を進めて行かなければならぬのであるが、これは中々至難の業である。と同時に想像の域をでない実証性に乏しいものである。しかし、あえて個々に検証してみよう。

ヤリガンナは木材加工の細部調整に使用される工具であるから、集落内で使用されたものと考えられ、研磨も当然その場所で行われたであろう。

鎌は狩猟用もあるかもしれないが、基本的に弥生時代のものは武器と考えられている。武器は戦闘用である。その場で研磨していくには間に合わないし、鋸びているような状態では効果も少ないのである。

斧には伐採用と加工用がある。伐採用は集落外の使用であり、加工用は集落内での使用であろう。携行品ということを考慮した場合、伐採用の斧が他の2器種と比較して有孔砥石の対象となる可能性が高くなる。しかし、斧を有孔砥石という手砥石で研ぐ効果はあまり期待できない。斧は住居址の床面によく見られる大きめの置砥石の方が効果的であろう。

## 5. おわりに

砥石の大きさ、形態、石質の相違は対象相手の鉄製品に規制される。津山市において、弥生時代の鉄製品は残念ながら斧、鎌、ヤリガンナの3器種しか出土していない。しかし、前項でみてきたように鉄製品と有孔砥石のセット関係を認めることはできなかった。このことは現在の感覚で弥生時代の研磨作業を見た結果であろうか。いずれにしても、鉄製品と砥石が出土しているという事実がある以上、証明するすべはないが、両者が有機的に結び付いていた事は間違いない。

以上、長々と述べてきたが、弥生時代に用いられていたものと同様の有孔砥石が現在も脈々と生きながらえていたという事実関係を提供していただいた稻垣さんに感謝しとめとする。

(註1) 津山市教育委員会が発掘調査を実施。報告書未刊。

(註2) 津山市教育委員会『大田十二社遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集1981年

(註3) 津山市教育委員会『向林遺跡・中鎌田墳墓』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第29集1989年

(註4) 鮎込遺跡、ビシャコ谷遺跡、西吉田遺跡、大開遺跡で各1点ずつ出土している。

(註5) 大田十二社遺跡で4点、沼遺跡、二宮大成遺跡、上部遺跡、稻荷遺跡で各1点ずつ出土している。

(註6) 小原遺跡、大畠遺跡で各1点ずつ出土している。